

# 千引

前

ワキ 甲斐守某

狂言 従者

ツレ 里の女（妻）

シテ 里の男（夫）

後

シテ 石魂

地は 陸奥

季は 秋

ワキ詞

「是は陸奥壺の碑を知行仕る。甲斐の守何某にて候。さても此所に千引の石とて大石の候。此石に魂有つて。人を取る事数を知らず。さる間此石を他国へ引き出だし。千々に割り捨てさせばやと存じ候。いかに誰かある。」

狂言

「シカぐ。」

ワキ

「汝存じの如く。彼石を他国へ引き出だし。千々に割り捨てさせうずるにて有るぞ。上六十下十五を

限つて罷り出で。石を引けと堅く申し付け候へ。

狂言

「シカぐ。」

ツレ詞

「誰にて渡り候ふぞ。」

狂言

「シカぐ。」

ツレ

「此屋の内には又人もなく候。」

狂言

「シカぐ。」

ツレ

「妾が事は女の事にて候ふ程に。石は得引き候まじ。」

狂言

「シカぐ。」

ツレ 「貧なる者にて候ふ程に。余の人もなく候。

狂言 「シカぐ。

ツレ 「実にや世の中に貧程悲しき事はなし。女の身にて諸人に交はり。石を引かんも恥かしければ。あらざる人に暇を乞ひ。何方へも行かばやと思ひ候。

シテサシ 「面白や風は昨日の声いよくかはり。人間の水南に流れ。天上の星北に拱く。夜は幾程ぞ子一つより。丑三つばかりの夜半の空。あら心すこの通路

やな。

ツレ 「万草に露深し。人静まつて更くる夜に。訪らふ人も檜柴の。扇をたゝくは風やらん。

シテ詞 「面白や古き詩に。夫を風と言ふ事あり。さなくは契りも遠夫の。通ふを風と宣ふかや。早此扇を明け給へ。

ツレ 「夜も深更になるまゝに。何とておそきぞおぼつか

シテ

「さればこそ通路の。遠きを行くに夜は明けて。さこそ遅しと松浦姫。ひれふる事を思ひやり。

下歌地

「我袖も涙ぞと。思ふと人はよも知らじ。恨むるも中々に。頼みぞ残る人心。

上歌

「実に待つは憂かるらん。く。頃しも秋の半過ぎの。菴さむき秋風の。打つ時雨すぎき夜に。我も泣くなり菅の根の。夫待ちかぬる折しにも。袖ばかり涙とや。袂うれしき月の夜。

シテ詞

「如何に申し候。是に酒を持ちて候ふ一つ聞し召され候へ。あら思ひよらずや。何とてさめぐと御歎き候ふぞ。

ツレ詞

「さん候何をか包み参らせ候ふべき。此の所は千引の石とて大石の候。此石を他国へ引き出だし。千々に割り捨てよとの御事なり。妾にも出で、石を引けとの仰せにて候へども。女の身にて諸人に交はり。石を引かんと恥かしければ。何方へも行かば

やと思ひ候ふ程に。御名残も今宵ばかりにて候へば。かやうに歎き候。

シテ「さてはそれ故の御事にて候ふか。さらば我名を顕はすべし。今は何をか包むべき。我は千引の石の精なり。御身と契りをこめし事。昨日今日とは思へども。早三年に奈良の帝の御宇かとよ。万葉集にも入りぬれば。世上に其隠れなし。されば石も生滅の境をのがれず。かく木石に心なしとは申

せども。今こそ情を見すべけれ。定めて此石を。千人してぞ引かんずらん。名こそ千引の石なりとも。我悪念を起すならば。如何に引くとも引かるまじ。其時御事立ち寄りて。石の綱手を取るならば。我石力を失ひて。平砂を車輪の廻るよりもたやすく引かるべし。さあらば不思議の人なりとて。御身に宝を与へつゝ。

地「早く富貴の身とならば。く。それぞ頼めし契り

の色。千代かけて玉の緒の。長き守りとなるべし。

ツレ「此程は誰ともさして白雲の。かゝる奇特を聞くよりも。胸うちさわぐばかりなり。

シテ「よしやよし誰とても。前世の契りなるべしと。

地「思へば今宵を。限りと知れば一夜をも。千夜になさばやと。思へど明くる東雲の。飽かぬ中の中々に。何しに馴れそめて。今更かなしかるらん。

ツレ詞「如何に申し候。皆々御のき候へ。妾ひとりして石

を引かうずるにて候。

狂言「シカぐ。

ワキ詞「是は不思議なる事を申す者かな。某出で、直に尋ねうずるにて候。いかに女。此石をひとりして引かうずると申すは汝が事か。

ツレ「さん候妾が事にて候。

ワキ「不思議なる事を申す者かな。既に千人して引くだに引かれぬ石を。汝一人して引かうずるとは。狂

氣したるか然らずは。上を嘲りて申すか。

ツレ「何しに上を嘲るべき。まこと不審に思し召さば。  
石を引かせて御覧ぜよ。」

ワキ「若し此石を引き得ずは。汝が科は如何ならん。」

ツレ「よしなき事を夕波の。此身を沈めおはしませ。」

ワキ「実にくかほどに二つなき。命をかくるは様子あらん。」

ツレ「もし此石を引き得なば。望みを叶へおはしませ。」

ワキ「中々の事望みを叶へ申すべし。さらば此石引き給へ。」

ツレ「是はまことか。」

ワキ「中々に。」

地「さらばと今は木綿だすき。く。斯く不思議なる争ひの。あることかたき石の綱手。立ち寄りて引かうよ。」

ツレ「我はあだ夫の。言の葉ばかり力にて。」

地「えいやと引けば不思議やな。石やがて動き出でゝ。  
引かれ行くぞうれしき。

ツレ「引くに引かれてうれしきは。

地「人帰るさの袂かな。

後ジテ「石に精あり水に音あり。風は大虚に渡る。

地「形を今ぞ顕はせる。

シテ「桜麻の苧生の浦波立ちかへり。

地「影はそれかや石鏡。

シテ「かはれる姿は恥かしや。

地「恥かしの。恥かしの。洩りなば人も白波の。

シテ「立つ名もよしや君故なれば。

地「千引の石も一人に引かれて。賤が苧環くるく  
くと。引かれて廻るや石車。

シテ「かやうに石魂顕はれて。

地「かやうに石魂顕はれて。さばかり妙なる大石なれ  
ども。龍車の飛ぶよりなほ早く。彼石山を引き越



し給へば。それより神の化現なりと。圍繞渴仰。  
富貴万福に恵みを施し。彼貧宅を富貴の家に。建  
石宿の栄ふる事も。く。彼石魂の情なり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第二輯』大和田建樹 著